



お産の時の感じに似ています。産声を聞くまで、五体満足かどうか不安と心配で息が詰まる。女性ならではの気持ちでしょうね。」
 花火の打上げ作業は、重労働だ。炎天下の準備作業で、全身が汗にまみれる。その意味では、男性の職場であるらしい。しかし、花火の色づくりに関しては、女性らしい繊細な色彩感覚が生きてくる。

夜空に描く夏の花。

八代市

津山 美恵子さん(46歳)

明 子さん(22歳)

美 子さん(21歳)



美子さん

シュルルル——闇をさいて、白煙がのぼる。ドドーン。空気をビリビリ震わせて、夜空に大輪の花が咲く。沸き上がる歓声。一瞬の夏が、そこにある。
 しかし、考えてみれば私たちは、美しい夜空のスクリーンは、美しい存在だ。
 八代市に女花火師がいる。津山美恵子さん。この業界では異色の存在だ。
 「花火に点火するでしょ。それからドーンと開くまでの数秒間。このわずかな時間が、なんともいえませんね。」

その花火の色を出すのが、星と呼ばれる小さな丸い火薬である。星は、色を出す薬品と火薬を配合して水で溶き、丸めて乾燥させる。

天日乾燥がいいという。赤、緑、青、銀、黄、紫の六色。

この星を、クラフト紙の玉皮に詰める。その詰め方で、花火の形や色が変わってくる。シンに入れる割り火薬は、モミに火薬をまぶして使う。その割り火薬を、ギョツと圧縮し、さらに、玉皮全体を紙で押さえて、圧力をかける。これがうまくないと、花火は凹形に開かない。これには、かなりの熟練がいる。

この凹形に広がる花火は、割り玉と呼ばれる。尺玉であれば、直径三百メートルくらいまで広がるという。同じ大きさの玉で、いかに広く咲かせるか。これが腕の見せどころなのだ。「二センチ。あと二センチ広げたい。」その気持ちで毎年夏を迎えるという。



明子さん

津山花火商會
 次女的美恵子さんは、仕上げ花火に情熱をそそぐ。しかも、彼女は花火大会の演出家でもある。八代の花火大会は、彼女の企画で始まる。彼女の演出に乗せられて、私たちは、うっとり夜空を見上げていた。さて、父親の

花火づくりは、家内工業である。その技は、親から子へ、子から孫へと伝えられる。門外不出の秘伝だ。幸い、津山さんは後継者にも恵まれている。長女明子さん、次女美恵子さんの二人。長女明子さんは、仕上げ花火の担当である。今の時代にあつたいろいろな仕掛けの構図が、彼女の指先から生まれていく。

美恵子さん

津山花火商
 明さんという、消防署に勤務。火をつける方と、消す方に別れた親子。この組合せはなんともおもしろい。

花火づくりは、一年中の作業である。寒風にさらされながら、冬の作業はつらい。コツコツと一個一個手づくりの作業がつづく。そして、夏本番。一瞬に燃え、一瞬に消える。「そこですよ。魅力は。」と、津山さん。「さあ、きれいに開くのよ。」願いを込めた、母娘三人の人生が、夢が、この夏もドーンと夜空に花開く。

